様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４　年　６　月　６　日現在

機関番号：　３４３０１
研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2009～2011
課題番号：　２１５２００５７
研究課題名（和文）　チベット仏教における論理学の研究

研究課題名（英文）　The Study of Logics in Tibetan Buddhism

研究代表者
白館　戒雲（SHIRATATE KAIUN）
大谷大学・文学部・名誉教授
研究者番号：10179062

研究成果の概要（和文）：インド大乗仏教の論理学を大成し、大きな影響を与えたダルマキールティの主著『量評釈』のうち、各々論理学、宗教論、認識論を扱う第１から第３章を、チベットで最も影響力のあるギャルツァプ・タルマリンチェンの註釈『解脱道作明』とともに和訳し、インド、チベットの諸註釈を参照して、詳細な註記を付けた。

研究成果の概要（英文）： We have made a Japanese translation of first three chapters of Pramānavārttika, a major work by Dharmakīrti, a Mahāyāna-Buddhist logician, which chapters deal with logics, religion, and epistemology respectively, and had great impacts on religious-philosophical thoughts in India, together with rGyal-tsab Darma-rin-chen's Thar-lam-gsal-byed, the most influencial commentary on Pramānavārttika in Tibet, referring to several commentaries in India and Tibet in its detailed footnotes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：仏教論理学
科研費の分科・細目：哲学、印度哲学・仏教学
キーワード：因明　仏教論理学　ダルマキールティ　『量評釈』　タルマリンチェン　般若学　法華経　金剛般若経

１．研究開始当初の背景

仏教論理学は、インド大乗仏教の論師ディグナーガ（陳那．西暦 480-540 年頃）の主著『集量論』により大成された。彼の思想は中観、唯識の大乗哲学と、さらにインドの諸宗教、哲学にも大きな影響を与えた。彼の孫弟子ダルマキールティ（法称．600－660 年頃）は主著『量評釈』においてそれを解説し、仏教以外の宗教、哲学からの批判にも答えた。それ以降、インド大乗仏教の僧院では必ずダルマキールティの論理学が学ばれて、中観、唯識の哲学もそれにより基礎づけられた。

11 世紀、「仏教後伝期」の頃からその論理学はチベットにも導入され、多くの論理学文献が翻訳され、ダルマキールティの『量決択』を中心に学習された。13 世紀初め、インド仏教がイスラム軍の攻撃により滅亡し、最後の指導者シャーキャシュリーバドラがチベットに亡命し、サキャパンディタにその学問を伝えてから、『量評釈』が中心となり、学習

され、問答を通じて研鑽されるようになった。その際、多くのインド撰述文献のチベット語訳を活用され、多くの註釈書が著された。14 世紀後半から 15 世紀初めにはツォンカパが出て、戒律を正し、中観（中道哲学）と密教に大きな革新をもたらし、ゲルク派が始まったが、その中観哲学もまた、ナーガールジュナ（龍樹）の中観、チャンドラキールティ（月称）の中観帰謬論証派の哲学を、ダルマキールティの論理学と統合して、論証の学問に位置づけたものであった。

ツォンカパ自身は論理学への大きな註釈書を遺さなかったが、彼の思想を継承して法嗣タルマリンチェンが『量評釈』へ大きな註釈『解脱道作明』を著し、その伝統がチベット、モンゴルの多くのゲルク派の学問寺に継承され、数多くの註釈文献が登場した。

欧米では 20 世紀前半より、その学問仏教の伝統の豊かな成果が、それを継承する学僧たちの協力を得て、近現代の研究と結びつけられるようになったが、日本ではそのような態勢が本格的になったのは 1980 年代以降のことである。論理学の分野でもそれが断片的に試みられているが、限定的な主題を扱ったものが多く、数多くの主題を総合的に掘り下げた翻訳研究は少なかった。これはインド撰述文献、チベット撰述文献両方に同時に精通して、それを詳細に比較研究することが困難であることにもよるが、結果的にこの領域の重要性に比べて、研究がさほど進展していなかった。

また、仏教論理学については、インドでの歴史は研究が進んでいるが、チベットのそれについては大きな進展がなかったが、近年、チベットで収蔵されてきた初期カダム派の文献類が目録として提示され、一部分が公刊されつつあるので、文献類に遺された歴史的な記述と対比すること、インド、チベットの論理学、認識論の流れを俯瞰しつつ研究することが、可能になりつつある。

２．研究の目的

上記のように、論理学の最重要の典籍『量評釈』とそれに対するタルマリンチェンの註釈『解脱道作明』は、インドの多くの撰述文献、インドからチベットへの学問伝承を承けており、中観、唯識の哲学の基礎でもある。後代にも多くの学問寺での修学の基礎となり、それを基点として数多くの復註が作成されている。

この『解脱道作明』は全 4 章のうち、簡略な英語訳と研究が第 2 章について発表されているほか、インド撰述の文献を詳しく研究する学者たちにより、特定の主題に限って、その一部分が参照されている程度である。

本研究者はチベットに生まれ、青年期にインドの亡命先で学僧として伝統を継承したが、その後、来日して近現代の研究方法をも学ぶことになった。その学問的な伝統について歴史的経緯と著作類について基礎的研究ができたので、それを一つのまとまったものとして提示すること、さらに、『量評釈』の全 4 章のうち、より重要性の高い章、または着手しやすい章である第 1 章から第 3 章までを、インド撰述文献、チベットでの先行文献、後の『解脱道作明』への註釈文献と比較対照し、それにより、語義と内容の詳細と概略を明らかにする。それにより、この分野での文献研究の基礎を広く提供することを、目標とする。

３．研究の方法

この分野での伝統の継承者として『解脱道作明』を読むとともに、『解脱道作明』の諸版を確認して、その文言の詳細を確定し、インド、チベットの註釈文献を参照して語義を詳細に調査し翻訳し、それへの註釈文献の対応部分を翻訳する。『量評釈』とその各章の内容、註釈文献に関しては、自性（本体）・果とともに否定的認識を論証方法の一つとして確立し、その応用としてバラモン至上主義と彼らの天啓聖典ヴェーダの絶対権威を批判した第 1 章「自己のための比量（推理）」については、インド撰述のものとして、ダルマキールティ自身の註釈とそれに対するシャーキャブッディとシャンカラーナンダとの二種類の復註がある。解脱を求める者にとってブッダこそが量（権威、認識基準）であることを立証し、ブッダが智恵と慈悲の実践より成就したことを説く第 2 章「量の成立」、そして、量（認識基準）は現量（直接知覚）と比量（推理）の二つだけであることを述べ、経量部と唯識派の立場から認識論を詳説した第 3 章「現量（直接知覚）」という二つの章については、デーヴェンドラブッディとプラジュニャーカラグプタの註釈とそれらへの復註がある。第 1 章で確立された論理学に基づいて、仏教、外教の諸問題について議論し疑問に答える第 4 章「他者のための比量」は、デーヴェンドラブッディ、プラジュニャーカラグプタの註釈とそれらへの復註がある。

またチベットでは、先行するサキャ派のサキャパンディタ著『正理蔵』、ツォンカパのもう一人の法嗣ケードゥプ・ジェによる註釈、タルマリンチェンの『解脱道作明』を継承するダライラマ 1 世、セラジェツンパ、モンラムペルワ、パンチェンソナムタクパといった歴代の学僧の解説書がある。また、ディグナーガやインドでの外道者の関連する思想については、近現代の日本、欧米の学者による詳しい研究が進んでいるし、『量評釈』自体についてもインド撰述文献を中心としてで

はあるが、第２章、第３章は全体の和訳研究が完成されており、第１章についてもほぼ全体について和訳研究が発表されている。
　そこで、タルマリンチェン著『解脱道作明』とそれらの註釈文献、研究成果を比較研究し、その一致点、相違点、創案などを詳細に調査する。

４．研究成果
まず、インド、チベットでの仏教論理学の歴史、その経緯について研究して、『チベット仏教　論理学・認識論の研究Ⅰ』の序論「量の歴史」として詳しく提示した。チベットでのそれは、歴史的記述と近年の文献再発見に基づく最新の論述であり、なおかつ最も詳しいものとなった。
　『解脱道作明』のこの和訳研究の仕事については、学界の指導的研究者により「将来のための基礎的文献の大量の翻訳研究」などと評価されているが、最重要の典籍『量評釈』と『解脱道作明』について、インド、チベットの諸文献を参照し、第１章から第３章までの和訳研究を完成し、発表することができた。第４章についてもその翻訳が半分程度、完成できて、その翻訳研究の公刊が来年度にはできそうである。また初めの三章についてほぼすべての偈頌についてインドの主要註釈文献の対応個所を示し、さらに『解脱道作明』の用語法の詳細な索引をも作成した。仏教論理学の分野においてこれほどの精緻な文献研究を伴った大量の翻訳研究は、世界的にも稀である。その過程でさらに、これまでの研究翻訳が含んでいる問題点を幾つか指摘し、そこに含まれる意味合いを考察することができた。
　この分野での最重要の典籍について大量の和訳研究と、全体にわたる詳細な用語法を採集し、その意味を提示することができたので、これらを基礎として、今後、インド、チベットでのこの分野での文献読解や思想研究での進展が、期待できることとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①　白館戒雲「中観派と唯心派における種姓と如来蔵について」、『印度学仏教学研究』第 60 巻、査読有り、2012、pp. 962-965

②　白館戒雲「『現観荘厳論』がインド、チベットで栄えたさまと仏性の規定」、『成田山仏教研究所紀要』第 35 巻、査読無し、2012、pp. 103-204

③　白館戒雲「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第１章「自己のための比量」の和訳研究（２）」、『成田山仏教研究所紀要』第 34 巻、査読無し、2011、pp. 159-253

④　白館戒雲「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第１章「自己のための比量」の和訳研究（１）」、『成田山仏教研究所紀要』第 33 巻、査読無し、2010、pp. 155-278

〔学会発表〕（計１件）
①　2011 年９月７日　龍谷大学における
日本印度学仏教学会
題目「中観派と唯心派における種姓と如来蔵について」

〔図書〕（計６件）
①　白館戒雲『チベット仏教　論理学・認識論の研究Ⅲ　－　ダルマキールティ著『量評釈』第１章「自己のための比量」とタルマリンチェン著『同釈論・解脱道作明』第１章の和訳研究』、人間文化研究機構・総合地球環境学研究所、2012、pp. 1-482

②　白館戒雲『チベット仏教　論理学・認識論の研究Ⅱ　－　ダルマキールティ著『量評釈』第３章「現量」とタルマリンチェン著『同釈論・解脱道作明』第３章の和訳研究』、人間文化研究機構・総合地球環境学研究所、2011、pp. 1-478

③　白館戒雲『弥勒法の研究　「未了義了義論」の麗飾』、西蔵仏教文化協会、2011、pp. 1-406

④　白館戒雲『チベット語訳妙法蓮華経』、西蔵仏教文化協会、2011、pp. 1-557

⑤　白館戒雲『チベット仏教　論理学・認識論の研究Ⅰ　－　ダルマキールティ著『量評釈』第２章「量の成立」とタルマリンチェン著『同釈論・解脱道作明』第２章の和訳研究』、人間文化研究機構・総合地球環境学研究所、2010、pp. 1-405

⑥　白館戒雲『チベット撰述『金剛般若経の註釈』　－　チョネ・タクパシェードゥプ著の和訳研究』、成田山新勝寺、2010、pp. 1-164

６．研究組織

(1)研究代表者
白館　戒雲（SHIRATATE　KAIUN）
大谷大学・文学部・名誉教授
研究者番号：10179062

(2)研究協力者
藤仲　孝司（FUJINAKA　TAKASHI）
佛教大学・総合研究所・嘱託職員